

「姑蘇繁華図」と18世紀中国におけるリアリズムの曙光

鈴木 陽 一

SUZUKI Yoichi

(神奈川大学大学院外国語学研究科教授)

1. はじめに

この小論は、昨年末に開かれた一班の公開研究会の成果報告書における序論に相当する。しかしながら、すでに2005年度の『ニューズレター11号』において、筆者自身が研究会の開催に至る経過とその内容を簡略ながら紹介しており、ここで繰り返すことは控えたい。そこで、この小論では、別の角度、特に一班の目的の一つに掲げる「東アジアの生活絵引き」作成にとって、我々が選択した「姑蘇繁華図」という資料はどれほど有効であるのかを検証することとした。

筆者は明清の小説を専門とし、そのテキストを解説する立場から、同時代の衣食住、風俗、習慣、信仰などに強い関心を持ち続けてきた。そしてそれらの事項について考察しようとする際には、当然ながら「非文字資料」をも視野に入れてきたし、中でも絵画、版画、彫刻などの図像については特に注目してきた。但し、筆者は、古典に対してこれを規範とする意識の強固な中国社会にあっては、文字であろうと非文字であろうと、社会の現実をリアルに写し出すという意識に基づく資料は稀少もしくは皆無に等しく、イデオロギーというスクリーンに写し出された「歪んだ」映像しか見ることはできないと考えていたため、中国の図像から東アジア版「生活絵引き」を造ることは不可能であると判断していたし、今でも中国の図像から具体的な生活に関する情報を読み取るなどできないのではないかという疑問を拭えたわけではない。しかし、その一方で、「姑蘇繁華図」を読み解くという具体的な作業を通じて、隘路ながらも「絵引き」を作成する道は開けているのではないかという考えも次第に強くなり始めてきた。そこで、この小論では、「姑蘇繁華図」は生活「絵引き」の資料として有用か否かを自らに問いかけ、その答えすなわち「姑蘇繁華図」は有効な資料たりうるという自らへの解答を以てこの報告書への序論としたい。

2. 日中間の文化的差違

2-1 文化的差違の諸相

江戸時代の日本の図像と、清朝の図像を比べると、我にあって彼にないものは一目瞭然である。すなわち、日本の図像は色、形、時に質感も含めて個別的であり、図像の向こう側には現実のモノやコトがあることを我々に語りかける。図像の作成者は個別の、特に細部にこだわり、こだわるあまり細部と全体の比率を取って狂わせることすら珍しくはない。しかし、それは現実の無視ではなく、極端に誇張された、時にカリカチュアされた、個別の名称を与えることができる現実の「写し」である。

これに比して、彼の地では細部は多くの場合殆ど無視される。人物の衣装を描くにも、日本の図像のように色や模様細部にはこだわらず、専ら人物の階級を示す記号として消費されるのみである。更に清朝の家屋に彫られた無数の彫刻や、年末に張り替えられる版画類に至っては、伝統的道德宣揚のための物語の一場面が切り取られて表現され、実質的には「忠孝」のごとき陳腐なスローガンか、「昇官発財」という剥き出しの欲望を、絵によって書きなぐっているに等しい。ここでは、二千年或いはそれ以上の時の流れの一部を切り取った物語の一場面が再現されているはずなのに、登場人物の服装も背景としての家屋も時代性、個別性から完全に切り離されている。時に人物の細部は、千年以上の時差を超えてほぼ同一である。名称も、個別の現実に対するラベリングではなく、その属性を記号化しているに留まる。

日本近世の図像が西欧近代のリアリズムと結びつくか否かは筆者の知りうるところではないが、少なくとも、現象的な類似性はある。江戸時代には、当時の人々にとって高い価値があると信じられていた芸術作品には、南画や狩野派のように現実から切り離されてしまったものも少なくないが、芸術と見なされず消費されていった浮世絵などの図像には、現実の「写し」と思えるものが多い。また、現実を分析的にとらえようとした在野の学者たちが多数の図像によって目的を実現していることも注意しておく必要がある。これらの図像が西欧近代のリアリズムそのものではなくとも、後に日本がそれを受け入れる上で重要な役割を果たしたと考えられる。

これに対して中国では、およそ個別のものを図像によって記録するとか、現実を図像化することによって文化的に消費するという観念は極めて弱かったように思われる。その分かりやすい例はポルノグラフィである。彼の地においても多量に生産されたポルノグラフィに記録された交接の場面や女性の肢体はあまりにも貧弱であり、図像の描き手は女性の喜悦の表情にすら無関心である。『肉蒲団』などの文字によるポルノグラフィも、類型的表現に満ち溢れているが、ポルノグラフィをテーマとする図像の単純素朴さは、そうした文章よりも更に顕著であって、果たしてその役割を果たしうるのか否か、甚だ疑問である。中国の図像については、比較的ましなものとして、百科全書的書籍における道具類、武器類などの図像が挙げられるが、これにしても文字によって記されたものに比べれば極めて粗略である。

しかし、中国の図像にも例外がある。それは「冥器」と言われる、葬式の際に燃やされる、或いは墓室や棺桶の中に入れられる精密な模型である。あの世の世界での生活を、現実とほぼ同じものとする漢民族は、現実の精密な模型をあの世に送り届け、死者に利用してもらおうとしたのである。

こうした習慣は紀元前に始まり、当初は陶器によって家具、道具、部下の文官や武人、召使い、家畜類の「冥器」を造り、墓室に埋葬した。それらの「冥器」は、秦始皇帝の兵馬俑に見られるとおり、当初等身大であったものが、次第に簡略化され、最終的には紙によって造られるようになり、燃やされるようになったのだが、しかし陶器であれ、紙製であれ、現実を模倣したものを造り、あの世に運んで使うというシステムは二千年間変化がない。あの世に運ぶという究極の消費においてのみ、漢民族は個別の現実を図像化することにエネルギーを注ぎ、言うまでもなくそれらは造られる側から地上より消えていったのである。先に一般の図像の違いについて述べたが、あの世での消費に関わる図像も根底的に異なることは、日本の棺桶に入れられる「六文銭」を見れば明らかである。そこで、次に我々は、両者の差異が何によって生まれるのか考えてみることにしよう。

2-2 差違と科挙制度

唐代に大いに発展した科挙という官僚登用制度＝試験制度は宋代に完成し、一時期の中断はあったものの、人々の意識を支配し続けた。この公平にして厳密な試験制度は、古典と註釈の暗記を強いた。更には特定の学派（多くは朱子学）による解釈のみを是とした。肝要なのは、ここでは解釈がどれほど現実に対して有効であるかということ問われてはいない、ということである。現実と解釈との関わりは皇帝が決定することであり、求められるのは、現実を古典の理論によって解釈し、典故をふんだんに使った古文で表現する能力である。そして、試験合格がより難しくなり、数十年かかって合格することも稀でない制度のもとでは、受験者、受験希望者と現実との距離は、いよいよ遠くなっていく。更に、そうした能力を試す試験に合格するためには、ラテン語にも相当する文語によって書かれた古典とその註釈とを暗記することであり、時代を映して変わっていく口語はこの試験とほとんど関わることはない。現実を認識し、思考し、表現する日常言語は、文字言語からは全く無視されるか、長い年月を経た後に一部が反映するのみである。ここにおいて、中国における文字と現実の関係は希薄になることを余儀なくされる。文字において然り、況や図像においておやと言うべきであろう。

試みに江戸の俳諧、川柳、狂句と明清の詩詞、或いは小品文と比べれば、その違いは更に明らかである。政治から遠ざけられた多くの日本のインテリたちは、政治への関心は風刺と嘲笑にとどめ、生活のディテイルを切り取って鮮やかに再現してみせることにエネルギーを注いだ。これに対して中国では、文人たるものは政治に責任を負うべしと考え、その経綸の志を詩文によって表現するか、さもなくば古典を絶対的な規範とするイデオロギーに従い、下手くそな模倣作を垂れ流すことにエネルギーが注がれた。文字の読み書きの教育が、科挙を目指す人々への教育と重なりあってきたため、当時にとってはそうした桎梏から逃れることは極めて困難であり、例外を見出すことは容易ではない。

2-3 無常と再生

先に冥器を取り上げたが、ここに日中間の文化的差違を考えるもう一つの重要な手がかりがある。中国の、特に漢民族はあの世とこの世とが全く同じ原理で成り立っていると考えている。従ってあの世でも「昇官発財」こそが重要である。更にこの世とあの世とが同じ原理で成り立っているために、両者の境界はさほど厳重なものではない。つまり生から死へは一方通行ではなく、再生という形（仏教的な用語では輪廻だが、中国の場合は再生イメージが強い）で戻ってこられるのである。そして戻ってくる場合にはもとの肉体に戻ってくるのが理想とされ、そのために死体の保存に多大の工夫と費用とを費やすのである。

或いは中国人のイメージする仙人に関する記述を読めば更に彼らの思考は明らかである。仙人は「屍解」(死んだものと見なされ埋葬されるが、いつの間にか屍体は消滅し別の場所で再生する)という形式で老人から童子へ何度も生まれ変わるのである。ここでは輪廻による全く新たな生ではなく、意識のみならず肉体ももとのままである。ここから読み取れる理想とは、無限の繰り返しによる永遠の生命であり、変わらぬ現実である。

これに対し、日本人は生から死への道を一方通行に近いものと考え、再生を願うにせよ、仏教的輪廻により新たな生を求める意識が強い。この意識の中から無常観が生まれ、それゆえに刻一刻と移ろっていく現実を、その刹那で捉えようという気持ちが我々には強いように思う。中国文学の影響から比較的距離のあった『新古今』や、

日本独自の発展を遂げた俳諧が、正に移ろう一瞬の時を切り取ってみせることが多く、そうした作品を我々は名作として評価してきたことがその証明となるのではあるまいか。

なるほど中国の詩文にも、小説にも無常といってよい概念、イメージは現れるが、それは単に運命論であり、しかもよくよく読んでみると、この世とあの世とをトータルに考え、「人間万事塞翁馬」であって、いずれチャンスは巡って来るという発想につながっていることが少なくない。常ならぬ世の中で、このあわいをかけがえのないものとして書きとどめておこうという、ある種のセンチメンタリズムを中国の文学に見いだすことは極めて難しい。

以上些かあらっばい議論をしてきたが、文字によるものであれ図像であれ、およそ日本のような現実と直接結び付いた文化が消費される文化的背景が、中国には乏しいことが理解されよう。とすれば、その中で生み出されてきた図像が果たして絵引きとして機能するか否かは、決して容易に確定できることではないのである。

3. 中国におけるリアリズムの曙光

では中国に、人々の日常生活を直接反映した文字テキストや図像はないのかということになるが、これに対する解答ははっきりと否である。明代を代表する長篇小説の中で、『三国志演義』など歴史小説を例外として、たとえば『西遊記』のような作品の中にも細部に当時の人々のディテイルが組み込まれている。更に明末に多数出版された短編小説には大半の作品に、明代後期の人々の生活の実態が反映されていると考えてよい。

しかしながら、それはあくまでも現実を忠実に反映しようという意識のもとに書かれたわけではなく、面白い話を集めた中に現実が反映されたにすぎず、しかも、その語りの言説は、俗文学の世界にあっても語り手は古典への志向に縛られるため、その形式も内容も雅俗混交であり、現実と理想、現実と古典とが入り交じっていて俄にはこれを弁別することはできないという問題点がある。同時代の都市伝説に取材したかと思われる物語の中に、テーマを説明するために古典の詩詞を引用することもあれば、古代の物語の所々に同時代の言い回しやエピソードが盛り込まれていることが珍しくない。

だが、こうした混淆も時代の推移とともに次第に変わっていく。特に18世紀になると、『紅樓夢』、『儒林外史』といった小説に代表されるように、明らかに同時代のことを同時代のこととして、更には自らの実人生と社会との関わりを描く文学作品が出現する。登場人物は依然として典型的ではあるが、一人一人の性格や行動、服装などがある程度描き分けられるようになる。そして、作中人物のモデルが誰であるかということが問題になるほど、作品の向こう側に現実を引きつけて見ることが可能になった。言い方を変えれば、小説という文学ジャンルが、現実を描きうるほどに深化した物語の言説を獲得したのである。この流れの先、19世紀になると、方言を利用した小説すら出現している。すなわち、清朝、特に18世紀には、言語と現実との関係が明代に比べ極めて近いものになったことが明らかに見て取れる。リアリズムへ向かう第一歩がようやく踏み出されたのである。

更に18世紀の中国を考える場合、西洋の影響も見過ごせない。この時期、革命を控えたヨーロッパで進行しつつあった様々な変化を反映した新たな文化が、天文学から始まって、様々な自然科学や人文科学、更には絵画技法に至るまでが中国に伝えられた。それがどれほど中国の文化に影響を与えたかを証明することは容易ではないが、ここでは可能性の一つとして、ヨーロッパのテキスト考証学が影響を与えることによって発達したと考え得

る清朝の考証学について触れておきたい。

中国の学問の根本は古典の解釈にあるが、特に先秦時代の古典をどのように解釈するかが重要なテーマであった。当初、漢の鄭玄を中心とする人々が解釈を施したが、六朝の激動期、多くの文人はこれに飽きたらず、独自の解釈を試みた。中には重要な成果もあったが、唐人は奇矯にすぎるとして多くはこれを退け、漢代の註釈を是とした。これを漢唐訓詁の学と言い習わすが、南宋の朱子は、彼らの解釈に現実離れしたところが多く、またイデオロギッシュであるとしてこれを退け新注を著した。朱子の註釈には清新で合理的なものが少なくなかったが、時代の制約から彼は別のより強烈的なイデオロギーである「君臣名分論」や「華夷の区別」を持ち込み、別の方向に古典をねじ曲げてしまった。清朝考証学はこの誤りを正すべく、古典が書かれた時代に遡って研究すべきであることを主張し、漢唐訓詁を経て古代へ戻ろうとした。そして、できるだけオリジナルに近いテキストを復元するとともに、テキストの中のモノやコトが当時の社会では何を意味していたのかを確定しようとしたのである。漢人の文人にとっては、清朝考証学が文字獄から逃れるためのアジールであったことは否めないが、一方で歴史、文学、言語に対する科学的な態度を確立することに功があったことも事実である。更に考証学者の文章、特に文人余滴と称される考証的な学術エッセイは、これまで看過されがちであった民衆の生活や風俗にも光を当てるようになり、人々のものの見方に少なからぬ影響を与えたと推察される。乾隆期には優れた地方史が書かれたとされ、それは何よりも「太平の御代」であったからだとされるが、もう一方で考証学に代表されるより科学的なものの見方が普及しつつあったこともその理由として挙げてよいのではあるまいか。

4. 18世紀と「姑蘇繁華図」

以上述べてきたように、中国の文字テキストであれ、図像であれ、現実との距離は往々にして極めて遠く、それらから現実を読み取ることは決して容易ではない。しかし、「姑蘇繁華図」が描かれた18世紀は、リアリズムの曙光が見え始めたと言いうる時代であり、人々のものを見る目に大きな変化の兆しが現れ始めた時代であった。更に、「太平の御代」と謳われた乾隆期は、特に大都市で暮らしている比較的富裕な人々にとっては暮らしやすい時代であったことは疑う余地はなく、とりわけ長江下流域は経済的發展に支えられ豊かな消費生活が可能であった。従って、蘇州であれ、杭州であれ、江南の都市であれば、たとえ狷介な考証学者の目であろうと、世をすねた作家の目であろうと、現実をある程度リアルに映しだしたとしても、「太平の御代」というコンセプトを揺るがすような現実を容易には見いだせなかったであろうと思われる。せいぜいが豊かさに引き寄せられた乞食、スリ、搔っ払いといった連中や、酔っぱらいの喧嘩や男女の痴話喧嘩程度にしか、苦情の種は見いだせなかったのではあるまいか。

実際、「姑蘇繁華図」では描かれている人物同士がなごやかに語り合っている場面が非常に多い。人物がある程度の大きさで描かれている場面では必ず複数の人物が語り合っている。しかも、通りすがりの人物の立ち話であるよりは、仕事をしながらの話とか、飲食をしながらとか、何かの行動をしながら語り合っている場面がほとんどである。言い換えれば、それぞれの人物が自らの担っている社会的役割を果たしている中で、他者との会話が行われている。このことは、「姑蘇繁華図」が人間を極めて具体的な、性別、年齢、職業などを有するものと

して、しかもそれぞれが他者との関係を有する存在として描かれていることを意味する。そして、西欧の近代リアリズム文学が「モノとモノ」の関係を通して人間を描こうとしたものであることから、「姑蘇繁華図」の世界はまさにリアリズムの世界と酷似したものといえる。この両者が本質的に同質のものであるか否かは今は措く。とりあえず、ここにリアリズムの世界に酷似した世界があること、リアリズム的な認識と表現が18世紀の中国に存在し広がり始めていたこと、「盛世」を褒め称えることと蘇州の町をリアルに描くことの間には深刻な矛盾は存在しないと想定されること、これらのことから我々は「姑蘇繁華図」が18世紀の蘇州を読み解くための「絵引き」の資料として利用できると考えてよいように思われる。

但し、「姑蘇繁華図」と現実との距離をより正確に把握するために、我々はもう一つの物差しを用意している。それは明らかに西洋近代の影響下で成立した、写真も含む図像資料である。これには清末の絵葉書、土産用ガラス絵、新聞雑誌の挿絵などが含まれ、これと「姑蘇繁華図」を比較することによって、「姑蘇繁華図」の中のリアルと考えてよい図像と、紛れ込んでいるであろう伝統的イデオロギーによって変形された図像をある程度識別することが可能になると思われる。

5. まとめにかえて

前節で既に述べたように、この小論では18世紀という時代背景を考えることによって、「姑蘇繁華図」を「絵引き」の資料として利用可能であることをとりあえずの結論とした。しかし、その一方でいくつかの留意すべき点が依然として残っており、そのことと報告書全体とを関係づけながら少し述べておく。

第一に、我々は「姑蘇繁華図」を中国美術史、或いは風俗画の歴史の中でどのように位置づけるべきか更に議論を積み重ねる必要があるが、この点については戴立強氏の報告が、「清明上河図」という最も重要な図像との関連を明らかにし、また金貞我氏の報告が風俗画の歴史と「姑蘇繁華図」との関係を明らかにしており、我々がどの方向に向けて議論していくべきかを示してくれている。今後は特に明清の図像資料との比較研究を充実させていくことで、両氏の提起に答えていくことになるものと思う。

第二に、馬漢民氏の報告が明らかにしたように、蘇州には豊富多彩な民俗と文化があり、その豊かな内容と「姑蘇繁華図」との関係を、図像のみならず、文字データやフィールドワークの成果の利用により、更に検討していかなければならない。

第三に、張長植氏の報告でも明らかなように、朝鮮半島には日本とも中国とも異なる、独自の豊かな風俗画があり、三者を相互に比較参照することによって、それぞれの特色が一層浮かび上がることになる。現在進められている日本近世の図像資料のデータ化が進めば、我々の研究に更に新たな可能性が生まれることが期待できると思われる。

この報告書の刊行により、我々の到達点が明瞭になったことは我々自身にとって何よりも喜ばしいことではあるが、既に四年目に突入しながら依然としてこのレベルに留まっていることを改めて猛省しなければならぬ。浅学と未熟を心よりお詫び申し上げますとともに、東アジアの生活絵引きが少しでも有用なものとなるために、多くの方の御叱正、御教示を心より願います。